

ケアする人のための プロジェクトデザイン 地域で「何かしたい!」と思ったら読む本

西上ありさ=著
定価2750円(本体2500円+税10%)
医学書院 ☎03-3817-5600



まちに飛び出すお供にいかが？

一般社団法人ケアと暮らしの編集社代表理事／医師 守本陽一

今、ケアする人が街に飛び出し始めている。

映画の上映会を行ったり、屋台を引いて食べ物や飲み物を買ったり、書籍などのシェアスペースを作ったりと、多様な活動が行われている。

こうした背景には、病院や施設、役所など、医療者が職場にいても、解決し得ない課題があるからという理由が挙げられる。

病気になる前の予防、病気になる後の生活支援の充実は、職場にいながらできるものではない。

また、地域のケアに今、生きがい、居場所、役割のある彩り

ある暮らしのデザインが求められているから、という理由もある。病院で治療をして元気になって家に帰っても、自分の生きがいや居場所がないままに日々を過ごす人は少なくない。孤独がタバコ15本分に相当する死亡率स्कであるとも指摘されている。また、貧困や教育格差などの要素が、「健康の社会的決定要因」として人々の健康に大きな影響を与えることも分かってきた。

そこで本書がその指南書、入門書となりそう。

大切なのはわくわく感

彩りある暮らしをデザインする上で最も重要なことはなんだろうか。私は、デザインする側のわくわく感ではないかと思っている。

ケアする人が自分たちの伝えたいことを「正しさ」だけで伝えても、誰も振り向いてはくれない。実際に、医療者が行う健康教室に来る人は毎回同じメンバーにとどまり、本当に届けたい人に届いていない現状がある。健康の押し売りになっているのかもしれない。ケアする人自身、責任感だけで進めていても、どこかで息切れし、続かないことは多い。

そこで大事なのが、わくわく感なのだ。私自身、地域でシェア型図書館や移動式屋台カフェを運営しているが、そこでもまずは自分がわくわくすることを大切にしている。わくわく感は、医療者の画一的な健康観を解きほぐす。自分がわくわく感を得ながら楽しんでいると周りのスタッフ、そして地域住民にも伝わり、自然と人が集まり、プロジェクトも続いていくのだ。

本書では、著者が関わった全国各地のプロジェクトも紹介されているが、それらの随所で、デザインする側のわくわく感に触れられ

る。これが地域住民に波及し、共感を得て、継続的なプロジェクトへとつながっているのだろう。この本を読んでいるうちに張っていた肩肘がほぐれてきた。

プロジェクトデザインの手引きになる

自分自身でプロジェクトを立案・計画し、実行する医療者は決して多くない。それはつまり、ケアする人の持つ想いをプロジェクトに落とし込み、住民に伝わりやすくするためにはどのような情報を編集し、デザインしていけばよいのかを知る医療者がほとんどないということだ。

ただ、本書があれば、それらの「デザイナー」や「編集者」の役割をサポートし、自分たちのやりたいことをわくわくする仕様に変える手助けをしてくれるはずだ。準備段階のSTEP、プロジェクトデザインのSTEPに沿って実行すれば、今からでもケアするプロジェクトを実行できる。

かゆいところにも手が届いている。プロジェクトを回すためのお金はどうすればいいの? 「参加者が増えないけどどうしよう?」 「クリエイティブな会議にするためにどうすればいいの?」。プロジェクトを回し始めて誰もがつまづく課題にも答えてくれているのだ。地域でプロジェクトを行ってみたいが、一歩を踏み出せなかった人にはぴったりの1冊だ。

本書を持って、ぜひ街へ出よう!